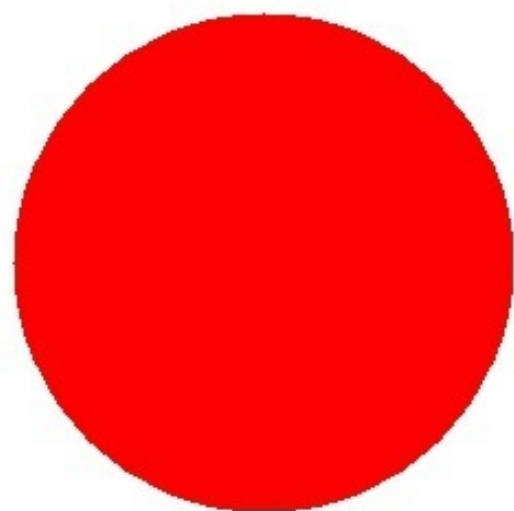
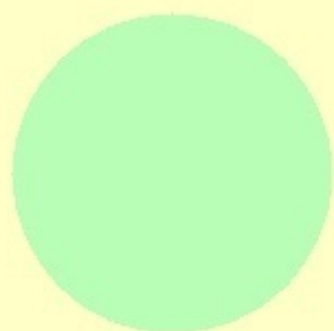


スペクトルム (一先駆ける者一)

3.11シリーズ VI+1



咲.

「例えば...この、林檎だけど...」

蘇芳 楸（すおう ひさぎ）は、机をはさんで向かい側に立つ、ふたりの前に...スケッチ用に持参してきた林檎を、置いた。

「うんまそおお〜！」

榎本 青馬（えのもと せいま）が、林檎に手を伸ばす。

「先輩の手首ごと...オブジェにしてあげましょう、か...」

林檎を鷲掴みにして、口元に運ぼうとする榎本の腕を...左手で掴んで止めた、春木 朱音（はるき あかね）は...右手に握ったペインティングナイフを逆手に振りかざし、口の端を吊り上げ、微笑んだ。

初夏の、まだ空高い陽光が、開け放った窓から差し込む、放課後の美術部の部室...

定期テスト明けの翌日に、部室に顔を出した部員は...二年の蘇芳と、一年の春木のふたり、だけ...だった。

「手、要らないもーん。俺、脚さえあれば、生きていけるもーんもーんもーん」

齧りつくのを諦めた榎本は、林檎を頭上に乗せ...器用にバランスを取りながら、おちゃらけた台詞を吐いた。

「榎本先輩は、ボールを取りに、ここへ来たんでしょ?...なら、このボール持って、早く、グラウンドへ戻ってくださーい！」

窓から吹き込んでくる風が、シャツの袖をふわりと...揺らす。

床に転がるサッカーボールを、短めのスカートから、すんなりと伸びた足の踵で踏んづけながら...春木は、榎本を促した。

「...やだ！テスト明けに部活なんか、やだ。...なあ、ひさぎいー、エロい本見せろよ、巨乳！プリンプリン...プリーズ！！」

サッカーウェア姿で腰をくねらせ、軽口をたたく榎本の頭上から、林檎を取り上げ...彼の腹に蘇芳は、軽く、膝蹴りを入れる真似をした。

「青馬の好きそうな本は、この部室には、ご・ざ・い・ま・せーん！！」

大袈裟に腹を抱え、前のめりのポーズを取る榎本の頭に...蘇芳は握りこぶしでグリグリとお灸を据えてから...机の上に、林檎を置き直す。

「で...この、林檎が...」

蘇芳が、椅子に座って話の続きを始め...対面する席の椅子を引き、春木も、腰を下ろす。

「嘘だぁ...こないだ来た時は、あったぞ、ハダカ写真〜！」

うずくまり、グリられた頭を両手の平で押さえ...榎本は、呻くような声を上げた。

ちらり...と蘇芳は、本棚を一瞥する。

裸婦写真のポーズ集は、変わらずに...そこに収まっていた。

榎本の視線が、天然パーマの頭髪と上腕の隙間から、彼を...見上げている。

交わす視線に、この茶番は、彼の気遣いなのだと...蘇芳は理解した。

「ばーか」

声には出さず、口の動きだけで伝えた言葉に、榎本は、ニヤリと笑い返す。

高二のクラス替えで、教室が分かれてからも...やれ昼飯一緒に食おう、やれ教科書を貸せ...と、様々に理由を付けては...蘇芳の教室に、榎本は、日参して来ていた。

...サッカーボールを、美術部の部室に蹴り込んで、接触を図るのも...その、パターンの一つ.....

。

立ち上がり、大股で机に歩み寄ると...榎本は、春木の隣の椅子を、前後をひっくり返して置き直し、またがって...腰を下ろした。

背もたれの上に組まれた両腕の上に...日焼けした顔が、乗せられる。

ふて腐れた犬、みたいだな...

その、ふて犬の目が...彼の右肘の内側に貼ってある、傷テープに注がれていた。

視線に気付いた蘇芳は、咄嗟に、左手の平で、傷テープを覆い隠す。

その仕草に...榎本は、眉根を寄せた。

「まだ、治らないんですか、蘇芳先輩...。そのテープ...テスト前から、貼ってあったよう、な...」

春木が、二人の無言のやり取りに気付いたのか...いま、彼が一番話題にして欲しくない質問を無邪気に...口にした。

「...ん...治らないんだ.....何で、だろう、ね...」

傷、見せて下さい。私、おばあちゃんの床ずれケアしてますから...何か、アドバイスできる、かも....

椅子から立ち上がりかけた春木のスカートを掴んで、強引に座り直させた榎本の顔面に、春木の...平手打ちが、飛ぶ。

「エ...エ...エロモトーッ！！な...なにになになになにいーっ??！」

スカートは、引っ張られたくらいで脱げるような代物では無かった、が...顔を真っ赤に染めた春木は、スカートの前を押さえ、レイヤーボブの髪を振り乱して...榎本に噛みついた。

「り・ん・ご！さっき、ひさぎは...何て云ったっけ？みんな、同じじゃない、とか、なんとか...

」

早く、説明、しろ、でなきゃ...食う、ぞ...

天然パーマの髪を掴んで、前後に振り回す春木の怒りに抗って...椅子の背もたれに両腕でしがみ付きながら、榎本は...切れぎれに声を、発した。

「朱音ちゃん...その馬鹿に、紙とコピック（マーカーペン）を、渡して...」

「サルッキー、紙とコピコピ、俺にちょーだあい」

「...サ...サル云うなあぁ〜っ！！」

春木は、自分のスケッチブックから一枚破り取り、榎本の目前...机の上に、それを叩き置いた。棚からコピックのセットを取り出すと、机の中央に据え、手早く、必要な色を抜き出していく。手前にあった赤系のペンを、適当に手に取ると...榎本は、用紙一杯に丸を描いて、内側を塗りつぶし始めた。

「ちゃんと視て、描く...」

蘇芳の言葉に、膨れっ面をしながら数秒、林檎を睨みつけると...榎本の林檎の絵は、ちょっとだけ...上部が凹み横に広がった形に、修正された。

さらに、同じ赤色で描かれていた芯も、茶色のペンで、上塗りがされる。

「できたぞー林檎。...で...これのどこが、違うんだああ？」

無言でペンを動かし続ける、美術部員ふたりに業を煮やし...榎本は、部室の窓から外に、顔を出した。

「おーい！おまえらあー！これ...なんに見えるーっっ？！」

「りんごー！」

「りんごちゃ〜ん！」

「赤い、ボ・オ・ルーッ！」

「歪んだ日の丸...ですかあぁーっ？！」

「せんばあ〜い！絵、ヘタすぎですう〜っっ！！」

二階の窓から突き出された赤い丸に...グラウンドで練習中の、運動部員たちの笑い声が、弾ける。

「榎本！サボってないで、早く戻ってこーい！！」

「...やべえ...っ」

サッカー部員の声に、榎本は首を引っ込め...そそくさと、席へと戻った。

描き終わった絵が三枚、机の上に並べられる。

「とまあ、視ていた林檎の面は、それぞれに違ってはいるんだだけ、ど...」

三者三様とは、まさしく...このことを云うのであろう...

微妙に違う赤い色が...そこには、あった。

「同じ物を視て、注目する部分...色の濃淡や明暗とか、表面の傷や斑点の描き込みとか、に...個人差が出るのは、当たり前なんだけど、さ...」

「えーっ？青なんて色、この林檎の中に、あったかあぁー？」

「...あ...！...机...の反射.....空の、青おーっっ！！」

机にへばり付いて、観察し直していた春木が...叫んだ。

「いや...反射とか、意識して視てはいなかった、けど...ね...。僕の目には、影や艶の中に、青味が入ってるように、視えたんだ...けど...」

「俺には見えねーぞお、青...どこだ？」

「私...紫が視えてきた、かも...」

あ...！紫って...青と赤の混色でした、ね...。春木は、ペロリと舌を出した。

同じ林檎を視ているはずなのに...お互い、見えてる色...ですら、“同じ赤”では、ない...。

「同じだと、思い込んでるだけ、なんだよね...」

指先で、林檎をゆらゆらと揺らしながら...蘇芳は云った。

「その林檎一つ、例に取っても...自分とまったく同じに見えている人は、この世界には誰ひとり、いない...なんて、さ...」

それを“個性”と云うのは、簡単だけど.....なんだか...寂しい、ね...。

呟いて...春木は、口をへの字に曲げ、拗ねた子供のように、足をばたばたと動かした。

「俺には、まるっきし解んねえ、けど...」

榎本が、ふて犬のポーズで林檎を睨む。

「けど...ひさぎを大好きな俺ほどには...ひさぎは俺を、好きじゃないんだってことは...よく...解った...」

蘇芳の瞳孔が、開く。

ぎゅるるるる.....榎本の...腹の虫が鳴った。

プッ...春木が噴出す。

はあぁーっ。大きなため息をつくと、蘇芳は、指先で林檎を弾いた。

「愛してるよお、りんごちゃ～ん！」

転がる先に、榎本が、大口を開けて待ち構える。

「愛してるのに...食うのか、おまえは」

「愛してるから食うんだよ。嫌いなモノは...俺、死んでも食わねええ～！！」

一口齧って、榎本の...動きが止まった。

「青馬、おまえさ...酸っぱいの、苦手、だったよな...」

う...あ...ううう.....

口を手の平で押さえ...榎本は、齧った林檎を咀嚼し...飲み込んだ。

「無理して食うな...。スケッチ用に、日持ちしそうな硬いやつ、選んできてんだから、さ...」

そりゃ、酸っぱいわあ...！春木が、お腹を抱えて笑い転げる。

「いや...これは、愛だ...。愛の、訓練なんだああ～！！」

涙目になりながら...林檎に齧りつく榎本の姿に

「それを云うなら、試練、だろ...馬鹿...。犬の、ご褒美か...って、の...」

蘇芳は、再び...大きく、ため息をついた。

初夏の夕刻は明るい、とは言うものの...東の空は濃い藍色に、染まり始めていた。

「...それで...ポリネシアンはね...水平線に立ち昇る、火山の噴煙を見つけては...その煙りを頼りに、遠く見えない島影を求めて、海原を渡って行ったって、説も...あるんだよね」

「地震や津波や食糧不足...島を襲った災害から、逃げるための...移住先の手がかりが、火山の煙だ、なんて...。私は...怖いな。行きたく...ない、かも...」

最終下校時間が迫っていた。居残っていた生徒たちは、部屋を飛び出し...足早に、校舎を後にしていく。

「定説では...流れ着いた椰子の実や、渡り鳥の飛んできた方角を...逆に辿って、島を発見していた...ってのが、有力だけど、ね...。生活できる土地が見つかる確率は、当然、そっちの方が高かったと...僕も、思うよ...」

「...ってコトは...火山目指して船出したポリネシアンは、すごい...先駆者だったんですねえーっ！...火山を見て、血が騒ぐ...そうか...昔の人も、そうだったのかああ...！！」

興奮気味に、校門を通り抜けた春木は...いつものように、バス停の方角へと歩き出さない蘇芳に気づき...彼の目を、訝しげに見つめた。

「ゴメン、今日はちょっと...ヤボ用...」

それじゃあ先輩！また明日ねええ～！！

肩に掛けたスクールバックを揺らし、バス停まで駆けていく春木を見送ると...蘇芳は、いつもとは逆方向の道へと...歩き出した。

「...火山が...どうしたって？スケッチ旅行の計画でも...立ててたのかよ...」

校門から少し離れた校庭の、柵に凭れて...榎本が立っていた。

待ち伏せに驚く風でもなく...蘇芳は、彼の隣りに立ち...校舎を見上げる。

「赤い色を見るとさ、興奮するのはなぜか...って話題から、火山の溶岩の話になって、ね...。九州南部の隼人って一族は、黒潮に乗って渡来したポリネシアン...先駆者の末裔なんだって説まで、話を...発展させていた...」

.....先駆者.....先駆ける者...か.....。

両手の指先を、交差する針金の柵に掛け...夕闇に浮かび始めた頭上の星を、蘇芳は見上げ...独言した。

「今日は、バイトの日、だったよな...。このままどこかで時間を潰して、それから...店に入って深夜まで...」

...で...その後は...どうするんだ.....？

榎本の問いに、蘇芳は無言を...返した。

「...家...帰りたくないんだろ...」

凶星を突かれ...柵の網に掛けられた、蘇芳の指が、白く...色を失う。

「その右腕...また...あいつの.....煙草、なの、か...？」

下校直前に...貼り直されたと思われる、右肘の内側の、真新しい傷テープ...。

「.....ああ.....」

吐息のように...蘇芳の咽喉の奥から、声が...押し出される。

「あんのお糞野郎おお.....！！！」

ガッシャアアアーーンンン.....

榎本の拳が、校庭の柵を、揺らした。

蘇芳の、長めに伸ばされた、後ろ髪...

吹き抜ける風を嫌い、髪を押さえる手の、その下に...赤黒い火傷の跡が隠されていることを...榎本は知っていた。

焼けたアイロン...襟足にそれを、押し付けた相手が、誰なのか...も.....。

沈黙するふたりの横を、高速で接近してきた消防車のサイレンの音が...走り抜けて行った。

「...近そうだな...」

重なり合うサイレンの音に、榎本は呟いた。

その声を遮るように、爆発音が聞こえ...校門前の道路の向こう...数キロ先に、煙の...立ち昇る光景が、見えた。

辺りの家々が騒がしくなり...子供たちが外に、飛び出してくる。

「行ってみるか？」

促す榎本に、蘇芳は、首を横に振った。

「オレは、行かない...」

「...そうだな...あの辺りには、化学工場も、あるし、な...」

煙に向かって駆けて行く子供たちに、榎本は、声をかける。

「おい！そこのガキィー！あんま近くまで、行くんじゃないぞおおー！毒ガスが出てるかも、しれないからなああーっ！！」

榎本の叫びに、ひとりの子供が片腕を上げ...頷いた。

後ろから来ていた小さな子を止め、しばしの言い争いの後...小さな子は泣きながら、道を、引き返して行く。

「兄弟かな」

良い兄貴、だねえ～。感心して見守る榎本に、兄は、手を振り...

弟が、家に入るのを確かめるや否や、猛然と...彼は、煙に向かって駆け出して行った。

「先駆者だね、彼、は...」

啞然とする榎本の姿に、蘇芳が苦笑する。

「まあ...なんだ、その...あいつは、無謀な先駆け者じゃ、ないようだ、から...大丈夫だろ.....たぶん.....」

自分を説得するように...榎本は、何度も頷いた。

コクコクと、首を振り続ける榎本...前屈みで、クツクツ笑いが止まらない、蘇芳...

どちらからともなく...ふたりは、大通りに向かってゆっくりと...柵の前から、歩み出していった。

危険から、まだ自らを守れない弟を、強引に...帰宅させた、兄...

「兄貴としては当然の、判断だったよな。...あの弟も、さ...。もうちょっと大きければ、毒ガスが出てるかも...なんて云われたら、自分から行くのを止めてたかも、知れないし、さあ...」

でもって、兄貴は...毒ガスの危険性を理解した上で、火事見物を、自ら...決断したワケ、で...

「大事な判断をするときって、さ...」

言葉より行動、の、彼には珍しく...今夜の榎本は、やけに...饒舌だった。

「判断を、人任せにすると...上手くいっても、喜びは半減...。失敗すれば、後悔よりも...その判断を下した相手を責める気持ちのほうが、先に立つ...よ、な.....」

人任せの、人生...

「そんなこと、繰り返していたら、さ...。いつか自分を...嫌いになっちまうと思うんだよな、俺は...」

そう口にした後...すまん、釈迦に説教だったな...と、榎本は...照れ隠しのように、エア・ボールをキックした。

説教じゃなくて、説法...

歩道のブロックを、トレーニング・ラダーに見立て、ステップを踏み始めた彼の背に...蘇芳は、つつ込みをいれようとした。...が...咽喉が詰まったように、声が...出せ、ない...

「.....でも...さ.....。相手が、自分で判断するのを許してくれないヤツだったら...どうするよ...。行き先も分からない船に、乗せられて、さ...。嫌だと云っても降りられない...危険があっても、教えて貰えない...回避も、してはくれない.....」

守るところか...逆に、危険な目に遭わせて、楽しむような...そんなヤツに、捕らわれてしまった、ら.....。

言葉は発せられず...蘇芳の心の中で、泡立ち、続けた。

これは...母のことだ、そして...あいつのこと、だ.....。

...逃げたら...逃れられたら.....自分を嫌いにならずに、済む、の...か.....？

「嫌いだよ、オレ、いまの自分、が...」

咽喉の奥で、口に出せない言葉は...苦く...溶けていく....。

蘇芳は目を閉じ、ゆっくりとそれを...飲み込んだ。

甲高くサイレンを鳴らし...彼らを追い抜いた救急車が、大通りの角を曲がり、炎に照らされ赤く染まった煙に向かって...走り去っていく。

「じゃ、また明日...」

十字路を、煙とは反対の方角に曲がり...蘇芳は足早に、歩き出した。

「楸...おい！ひさぎ...っ！！」

振り向くと、小さなキラめきが、榎本の手の中を離れ...胸にぶつかる寸前で、蘇芳は...それを受け

止めた。

「サッカー部室の鍵だ！ソファがあるから、バイトが終わったら...そこで休め！俺が、朝イチに来て、起こしてやるから...さ！」

サボりの罰でさあー、朝練の当番、押し付けられちまったのさあー。

ひらひらと、榎本は上げた右手の平を振り...背中を向けた。

「馬鹿...」

いや...バカじゃない...。そこまで計算した上での、サボり、だったのか...

数歩、進めていた足を止め...蘇芳は振り返った。

今しがたまで、ふたりで歩いていた道...その、延長線を見上げ...呆然と立っていた榎本が、突然、大声で叫んだ。

「晩飯いー！！食いそびれたあああー！！！」

榎本の視線の先で、“有明ヶ丘学園”の、看板を掲げた建物が...濃さを増していく宵闇の中へと、静かに...溶け込もうとしていた。

“児童養護施設”の文字が小さく...スポットライトに照らされた、学園名の看板の下に描き込まれているのが...見える。

建物の上階、居住区の灯りは全て、消されていた。

いまは夕食時...皆は食堂に、集まっている、時刻....

「やっぱ...馬鹿、かも...」

がっくりと、肩を落とした榎本は、十字路の角に立ったまま...横断歩道を渡ったその先の、鎮火し始めた煙の方角に...顔を向ける。

...バイトに入るには、まだ、時間があつた。

引き返したい衝動に駆られ、蘇芳は...彼に背を向ける。

戻って、そして...オレは...何を期待している...？

榎本は...これから、火事の現場へと向かうつもり、なのか...？

それとも...児童養護施設への道を、辿り帰って行くの、か...？

名を呼べば届く、僅かな隔たり。

たった...それだけの距離、なのに.....。

分からない、よ....

「...おまえの目には、この世界はどう.....映っている？希望の色、か...それと、も.....」

声が...聴こえた....

F o l l o w M e.....

榎本が、独りのときによく、口ずさんでいるジャズ・ソング。

空耳のようなその歌声は、吹く風に翻弄され...遠く、去っていくように.....近く...耳元で、囁いているかのように.....蘇芳の足元に、絡みついてきた。

...寂しい...

そう云った、春木の気持ちが...いまなら、解る...

...いや.....解ったような気が、する.....。

振り返りたい欲動に抗い...整然と立ち並ぶ、新興住宅地の灯りに向かって、蘇芳は...重い足取りで、自らの歩を.....踏み出していった。

終

※「スペクトルム (s p e c t r u m)」とは、スペクトラムのラテン語読みです。

本作では、“見えるもの”や“光 (虹色)”などの、意味を持たせていますが、広汎性発達障害 (自閉症やアスペルガー症候群) の名称としても知られていますので、あえて、ラテン語読みを使用してみました。

※「F o l l o w M e」 作詞: Herbert Kretzmer・Hal Shapey 作曲: Joaquin Rodrigo

2013年10月6日 初稿

スペクトルム（一先駆ける者一）

<http://p.booklog.jp/book/77288>

著者：咲.

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saki62e81/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77288>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77288>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ